

実存における真理と自由

——教育的世界の存在論的考察 その2——

和田 修 二

1

教育 *Erziehung* とは、人間を現に在る状態から引き出して本来在るべき状態まで導き、形成してゆくこと *Bildung* である。したがって、そこには、あらかじめ人間の現実と真実に対する何らかの像 *Bild* がなければならない。如何なる教育が行われるかということは、如何なる人間像 *Menschenbild* がもたれているかということと一体である。

ところで、教育が *Bilden* として考えられるとき、そこには人間が理想像 *Vorbild* に向って限りなく近づき得るということ、連続的發展の可能性が予想されている。よきものへの連続的發展という思想には、また、人間が本来善であるということへの信頼が含まれている。してみれば人間の陶冶性 *Bildsamkeit* が肯定され、教育の力が積極的に信ぜられているところでは、いつも明確な *Vorbild* をもった楽観的な人間観が前提されているといつてよい。

しかるに、現代の特徴は、人間に対するこの明確な理想像とオプティミズムが、完全に失われてしまったことにある。歴史的研究の発達は、不動の本質をもつ人間の観念と、普遍妥当的な教育目的の存立を否定し、二つの世界戦争は、人間の内なる深淵 *Abgrund*、虚無を自覚させて、教育に対する不信と倦怠を生み出した。シェーラーの言葉を借りれば、現代は「人間が完全に疑問となった最初の時代」であり、「人間が自分は何であるかをもはや知らず、しかも同時に、自分がそれを知らないことを知っている」時代なのである。¹⁾

このことは、結局、何らかの形においてニヒリズムとの対決を欠いているような教育哲学は、今日では無力であるということにほかならない。われわれの時代の深刻な問題は、思想や行動の量的不足ではなく、質的充実の欠如に、文化の中心喪失にある。したがって、かかる状況のもとでは、われわれは何よりもまず、一切の価値と意味の源泉としての神は死んだというニィチェの宣言と、この宣言からすべての結果を徹底的に引き出そうとする実存哲学 *Existenzphilosophie*, *existentialisme* を媒介とした、教育へのアプローチを真面目にとりあげなければならないであろう。

2

サルトルによれば、人間が他の存在者と異なる由以は、彼がいつも何らかの概念的限定に先立っ

1) Scheler, M.: *Mensch und Geschichte*, S. 8~9

ているというところにある。人間はまず先に世の中にあり、そこで出会われ、そのあとで定義される。換言すれば、人間は最初は何者でもないのであって、ただ彼がそう考えるものであり、かくあろうと望むところのものなのである。そのかぎり、人間の Da-sein は Was-sein に、「実存²⁾ existentia は本質 essentia に先立つ」。「人間とは自ら造るところのもの以外の何者でもない」。人間の実存とは、そのつどの存在可能性であり、主体的投企、自由そのものである。したがって、人間は自ら存在するところのものに対して、神に代って全責任をもたなければならない。実存主義は最も徹底した形の人間中心主義 humanisme なのである。

しかし、人間が無限の責任を負って、何の拠所も助けもなく、刻々に自己を創り出すということとは、いわば「自由の刑罰」として、人間が常に出口のない孤独と不安の中にあることでもある。しかして、自由なる投企は、不断の超越 Transzendenz を意味し、超越は同時に、それがそこにおいて生起し完了される場としての世界を前提する。人間存在とは、それ故、ハイデッガーによれば、世界内存在 In-der-Welt-sein であり、世の中に在るということは、他から限定されていること、有限存在 Endlich-sein として、究極には無あるいは死に至る存在 Sein-zum-Tode だということである。

かくて、Da-sein とは無の中に差しかけられていること Hineingehalten in das Nichts であり、したがって真実の自己になる、実存するとは、死をみつめて生きること in Angesicht des Todes stehen、彼の有限性、被投性 Geworfenheit をさがけて引き受けること Vorlaufen にほかならない。このことは、換言すれば、現存在が本来的に未来的であり、また未来的であるかぎりにおいて既往的であり得ることであって、時間が未来から時熟 zeitigen しつつ、現存在の関心 Sorge の中に、そのつどの瞬間における決意 Entschlossenheit の中に生起することを意味する。してみれば、客観的な時間的出来事としての歴史 Geschichte もまた、本来的には現存在の決意性のうちにある主体的出来事 Geschehen となろう。したがって、人間は決意的な超越の反復において、客観的世界への隷属を断ち、悪しき歴史的相対主義とニヒリズムを脱して英雄的にその中に耐え、積極的に現実を造り変えてゆくことが可能となる。³⁾

3

結論的にいえば、実存哲学はまず時代の虚無性を暴露したという意味で、歴史的には危機の哲学であり、また、この虚無が同時に人間の実存そのものの中に潜むことを明らかにした点で、気分的には不安の哲学であること、さらに、瞬間における反復的決意において歴史の超越を試みた点、行為的には英雄的反抗の哲学であるということが出来る。⁴⁾それは、現代が当面するさまざまな危機が、単に原因を外に求める政治的、経済的、技術的変革では処理できない深みをもつこ

2) Sartre, J.: L'existentialisme est un humanisme 伊吹武彦訳19頁

3) Bollnow, O. F.: Existenzphilosophie S. 129

4) 高坂正顕：詩と哲学、146頁

と、したがって、外からの変革は内からの自己の在り方の変革をまたねば不可能であることを明らかにした。教育学的にみれば、実存哲学は一方において、人間の本来性 *Eigentlichkeit* と非本来性の違いを質的相違 *Artunterschied* とみることによって、それを量的相違 *Gradunterschied* とみる発達を前提とした従来の連続的過程の教育 *Pädagogik der stetigen Vorgänge* がもつ限界を明らかにし、真理の主体性を主張して、総ては教えられるという主知主義的な技術 *Technik* としての教育に対する楽観的信仰をうちこわした。他方、実存哲学は、これまで生の異常ないし欠陥と見做されてきた迷いや苦悩や不安の如き問題的状况、*Krise* が、実存の覚醒 *Erwecken* という意味における究極の人間生成に積極的意義をもつことを明らかにして、教育の次元を拡大し、実存の特徴に応じた新しい教育形式、非連続的過程の教育の解明を課題として提出したといえよう。⁵⁾ ボルノウはこのような実存的教育形式として、*Ermahnung* 訓誡、*Begegnung* 出会い、および *Engagement* 参加、没頭をあげている。即ち、人間の本来性はただ決意的に全く獲得されるか失われるかのいずれかである以上、実存の覚醒はそのつどの魂の内奥に対する直接的な呼びかけ *Anruf*、訴え *Appel* による。しかも自己の核心に訴えてくるものは、自己と絶対に独立した堅さをもつ主体、人格的な汝 *Du* として現れるものである。ひとは「汝」との出会いにおいて「我」となる。我が汝と出会うことはまた我が汝を汝として選ぶことにほかならない。そして、選び、参加し、それに没頭することにおいて、主客は断絶しつつ飛躍的に一体となり、我は汝に語りかけると共に汝から出会われ、語りかけられるという、自由な相互作用に基づく交り *Kommunikation* の可能性が開かれるのである。実存はこの自由な交りにおける鍛練 *Drill* を通じて覚醒され、実現されるものにはかならない。

4

しかし、上のような実存主義的人間観は、とかく現存在の不安のみを強調して実存の決意を偏狭に誇張、英雄化し、結局空虚な冒険 *Abenteuerum*、無責任な享楽 *Selbstgenuss* に終る危険のあることが反省されなければならない。事実、象徴的にはキリロフやスターヴロギンの運命に、歴史的にはナチズムやファシズムの出現において、この危険は明らかである。無制約的な賭 *Einsatz* は、はっきりした内容をもった信念に支えられているときにのみ、真であり責任あるものとなることができる。そのかぎり、実存哲学は必然的に何らかの新しき信仰、敬虔 *Neue Gläubigkeit* に向って自らを突破してゆく必要があると考えられる。⁶⁾

しかし、同じく実存といい決意といっても、ハイデッガーの場合は、少なくとも彼の後期においては、サルトルやニッチェにおけるそれと同じにみることはできない。彼は死への存在や決意をといた「存在と時間」における彼の思考が、実は「存在 *Sein* を存在の真理 *Wahrheit des Seins* においてはっきりと考えるべき途を拓く」⁷⁾ ためのものであったこと、彼のいう *Existenz* とは大

5) Bollnow, O. F.: *Erziehung Wozu?* S. 39

6) Bollnow, O. F.: *Existenzphilosophie*, S. 131

7) Heidegger, M.: *Was ist Metaphysik?* S. 13

衆の対立概念としての私的な個別者でもなければ、*essentia* に対する *actualitas* としての *existentia* でもない、したがって、決意も主体の意志的行為ではなく、かえって存在するものに対する人間の支配的態度と執着をすて、存在するものがそのものとして露わとなる場へと開き立つこと *die Eroffnung des Daseins aus der Befangenheit im Seienden zur Offenheit des Seins* であり、この *ent-schliessen, offen-stehen, ek-sistieren* が *Existenz* の意味であるという。したがって、サルトルの実存が人間の本質を主体性にみるヒューマニズムであり、無に面した不安と反抗を特徴とするものとすれば、ハイデッガーの実存では、人間の本質を開存 *Ek-sistenz* とみることによって、人間のこもり立つ脱我的な次元としての存在が中心となる。したがって、ヒューマニズムの突破であり、存在の内にある安らぎ *Geborgenheit* と謙虚さ *Demut* を特徴とするといえよう。このことは、実存が不安から希望へ、反抗から帰依へ、あるいは不信から新しき信仰へ向う何らかの転回 *Kehre* を内包していること、したがって実存哲学にも二つの時期または種類があることを予想させるであろう。少くとも単なる不安と反抗の哲学としての実存哲学は、克服さるべき過渡であるといわなければならない。事実、実存におけるこの *Kehre* の必然性は、真理と自由の本質を考えると明らかとなる。

5

真正なるもの *das Echte* としての或ものの現実性は、あらかじめ本来的と考えられていることに合致していること *Stimmen*, 即ち正当性 *Richtigkeit* にあると考えられる。しかし、合致が成立するためには、合致するものがあらかじめ露わなものとして発見されていなければならない。してみれば、事物が露わにされていること *Unverborgenheit, ἀ-λφθεια*, 即ち開示性としての真理が、合致としての真理に先行することになる。しかし、事物が露わであるということ *Entborgenheit* は、事物を露わにすること *Entbergung* に基づく。そして、事物が露わなものとして自己を開示するには、われわれがかかる露わなもの *das Offene* に向って自己自身から自由になっている *Frei-sein* ということがなければならない。そのかぎり、露わな規準に合致するために自由となるということは、既に露わなものを露わにするための自由としてのみ可能である。露わなものが露わになるとは、存在者が存在することにほかならないから、この意味での自由は、事物をそのものとして在らしめること *Sein-lassen* として、真理の本質であるといえる。

しかして、*Sein-lassen* は *Sich-einlassen*, 即ち事物がそこにおいて現われる開示性へと参加し、踏み出していることを意味する。したがって、「自由の本質は開示性への出存 *Aus-setzung*」である。人間はこの *ek-sistent* な自由において、開示性を現 *Da* としてとりこむ現存在 *Da-sein* なのであって、この *Da* においてあらかじめ事物を発見し、それと出会うことが可能となっているのである。してみれば、ふつう考えられているように「人間が自由を属性として所有するのではなく、かえってその逆が妥当すること、自由、即ち開示的・暴露的に現に在ること *das ek-*

sistente, entbergende Da-sein が人間を所有する⁸⁾といわなければならない。換言すれば、人間は意志的・選択的自由に先立ってその在り方が本来自由であるのであり、意図的合致や発見に先立って、その在り方が本来発見的なのである。しかし、真理が開示性への開存によって可能であるといっても、開示性自体は現存在が勝手に作り出すわけにはゆかず、ただ所与として受けとられるのみであるから、真理の究極の根拠は、開示性自体、即ち存在にある。存在者が露わであるということは、存在者の存在の開示、存在のアレティアにはかならない。したがって、「真理の本質は存在の真理である」Das Wesen der Wahrheit ist die Wahrheit des Wesens⁹⁾という、ハイデッガーの Kehre が起るのである。われわれはここから、従来主体性の問題としてとりあげられてきた真理と自由が、したがって実存の問題が、いまや存在の問題として提起されねばならぬ由を知るであろう。それはまた、実存哲学が克服しようとした近代の死病ニヒリズムの根源を、あらためて存在論的に検討し直す必要があるということでもある。

6

ハイデッガーによれば、ニヒリズムとは存在するものがその根底において無化されていること、存在者の存在が忘却されていること Seinsvergessenheit である。もし然らば、無制約的な価値定立の原理としての力への意志 der Wille zur Macht を本体としたニッチェの実存は、存在するもの一切を自己の維持高揚のための単なる条件と見做すかぎりにおいて、存在忘却の徹底であり、ニヒリズムの完成者であっても克服者ではない。ニヒリズムの原因は、ニッチェが考えたように価値定立の原理が生の彼岸にあるからではなく、およそ存在するものが価値評価の対象とされるということそのことの中に、つきつめれば、人間が主観・主体 subjectum となり、世界が主観に表象 vorstellen された単なる客観、像 Bild に転化するということの中にある。その意味で、ニヒリズムの根源は主観—客観関係において対象化する思惟である。したがってその克服は、死せる神々の復活や超人待望によってではなく、ただ思惟の根元的転回、忘却された存在の回想 Andenken an das Sein selbst¹⁰⁾によるほかはない。

その際、存在の思惟 das Denken des Seins ということばにおける〈の〉という所有格は、二重の意味を、即ち、思惟が存在に属する、そのかぎり存在がわれわれに思惟させるという意味と、存在についての思惟、即ちわれわれが存在を思惟するという意味とをもち得るであろう。ところで、現存在はその現において既に存在の贈与 Geschick, 投げ Wurf の中に投げられているのであるが、存在の Wurf はいわば Ruf として、人間が本質的に存在から呼びかけられていることだともいえる。したがって、存在の思惟とは、この存在の語りかけに耳を傾け、それに答えて antworten 云うこと ent-sprechen, 「存在の言 Wort を求め」、この言を表す人間の「言葉

8) Heidegger, M.: Vom Wesen der Wahrheit, S. 16

9) Heidegger, M.: Ibid. S. 26

10) Heidegger, M.: Holzwege 特に Der Zeit des Weltbildes. 参照。また、この問題については拙稿「ニヒリズムと思考の転回」(京都大学教育学部紀要Ⅴ号)参照

Sprach の使用に心を配ること」¹¹⁾、換言すれば詩作すること Dichten だということができる。言葉が主体の恣意的な道具ではなく、存在の呼びかけに適合した、いわば存在の家 Haus des Seins となるとき、かかる言葉において事物はその本質を顕わにし、したがって事物と事物、事物と人間の関係が確定される。そして、確定した事物の関係の上のみ、安定した住いと着実な建設が可能となるから、存在の思惟は実に「言葉による存在の建設」 *worthafte Stiftung des Seins* であり、¹²⁾「歴史を荷う根拠」だといってよい。根元的に思惟する Denken とは、詩人的に語ること Dichten であり、詩人的に住う Wohnen ことが、根源的に建てること Bauen になる。そして、*ἡθός* が元来 Aufenthalt 住いを意味するところから、われわれは存在の明るみに住い、ひたすらに存在の言に耳を傾けて詩人的に生きようとする謙虚さ Demut と畏敬 Scheuこそ、一切の倫理に先立つ根源的倫理だということを知るのである。

7

このように、人間のもとの在り方は、Vorstellen 表象し、Herstellen 作成しつつ、存在するものの支配者 der Herr des Seienden として生きることではなく、かえって存在の明るみを守り、存在するものをその本来の姿において見張り hüten、保護 schonen して生きようとする存在の牧者 der Hirt des Seins たることにある。¹³⁾そして、教育 *paideía* の本質も、すでにプラトンの洞穴の比喻にみるように、事物の本質の隠された場所から、隠れなく顕われた場所に慣れ変わることを、人間を存在の開け *ἀλήθεια* に立つべく転回することとして、開存たることの覚醒にあった。¹⁴⁾では Existenz が Subjektivität ではなく Ek-sistenz として存在の真理から理解される場合、かかる人間理解に呼応した教育形式には如何なるものが考えられるか。私は沈黙 Schweigen の戒律がこのカテゴリーに当たると思う。

もちろん、ここに問題とする沈黙とは、日常会話における言葉の多少をいうのではなく、現象的な対話以前の根本的な在り方、態度としての沈黙である。われわれはふつう、まず問いがあってその後に答がくると考え、かかる答を得ることが教えることであり、学ぶことだと考えている。しかし、最初にあるものは決してわれわれの問いではなく、実は問いをして問わしめているところのものであろう。してみれば、既述の如く、問い且つ思惟するということ自体が既に、問いの中で、しかも問いとしてわれわれの本質に語りかけているものへの応えにはかならない。問いが既に本来応えであるとするれば、本質的なものは問いそのものであって答ではない。したがって、真に学ぶということは、問うことを学ぶことであり、真に教えるということは、学ぶことを教えることである。そして、われわれに語りかけるものの中にわれわれがとらえられており halten、この Haltung 保持・態度をわれわれが behalten 所持するときのみ、われわれは正しく

11) Heidegger, M.: Was ist Metaphysik? S. 50

12) Heidegger, M.: Hölderlin und das Wesen der Dichtung, S. 10~12

13) Heidegger, M.: Über den Humanismus, S. 29

14) Heidegger, M.: Platons Lehre von der Wahrheit, S. 25

語り、思惟することができるとすれば、かかる思惟を学ぶのは、この語りかけに対して全心をあげて聴き hören 従う gehören とときである。その畏敬に満ちた傾聴に際しては、ただ深い沈黙があるのみであろう。沈黙とは、したがって、人間の本質に入り来る無制約的なものに向って自己が開かれ、とらえられていることである。この無言の声 Stimme に規定される bestimmen ことによって、われわれは根元的に気分づけられる Stimmen のであり、共通の気分 Stimmung の中ではじめてわれわれの出会いと対話が可能となる。してみれば、まことの教育とは、教えるものと学ぶものとが相共にたずさえて、彼らをとらえている問題の無制約性の前に sich-entschliessen し、透明となるとき、無制約的なもの自体の Geschick として、無制約的なものから geschehen するといわなければならない。しかして、われわれが根源的に呼びかけられていることは、われわれが無制約的なものの投げによって投げられていること Geworfenheit であった。人間の被投性は人間の有限性 Endlichkeit である。したがって Endlichkeit の自覚、即ち教え得ず、学び得ぬ無力の告白、挫折 Scheitern の中で、逆説的にわれわれは無制約的な力を感得してその中に摂受され、かえって教え学ぶ力を贈られるのである。かくて、真実の教育がその本質において人為をこえた Schickung であるとするれば、われわれに可能な最高の教育的行為は、謙虚な聴従に基づく無言の実行があるのみであろう。実存への教育は、ただ沈黙して聴き合い、働き合うことにおいて、教え学ばれるほかないのである。しかも、その沈黙の実践において、教えるものも学ぶものも、彼らの関係が Geschick 運命であるが故に、例え如何ほどの挫折に逢おうとも、機到れば必ず成るとの希望と安心をもち得るのである。教育への揺ぎなき情熱は、ここから復活するといわなければならない。¹⁵⁾

8

かくて、実存の問題は、主体性の主張から存在の思惟へ、したがって、表象し加工する教育 Bilden から、聴従し愛育する教育 Schonen へと転回がなされなければならない。そこにのみ、人間を物化 Verdinglichung から救い、ニヒリズムを根底から克服する途がある。しかし、だからといって主体性としての人間の在り方、対象的思惟への充足が、全くの誤りであり、単に存在の思惟の不注意な忘却というが如き人間の怠慢のなせるわざだということができるであろうか。存在忘却が人間の責任によるものであり、したがってまた、人間の意志によって克服され得るようなものであるならば、おそらく人類はこれほど長い迷誤の歴史を必要としなかったであろう。事実、主体性としての実存と開存としての実存は、全く無関係なものではない。むしろ前者の出現が、後者の構造の中に含まれているのである。

存在するものは存在の真理、存在の明るみ Lichtung des Seins の中で自己の本質を開示するが、存在の明るみは存在者を明るめ、前景に浮き立たすことによって、かえって自らは背後にひ

15) Heidegger, M.: Holzwege, Was heißt Denken 参照
Bollnow, O. F.: Existenzphilosophie und Pädagogik, S. 149 参照

きこもる。その結果、明るみそのものは忘却され、明るめられた事物が、それ自体明るみをもつかのように錯覚される。「存在するものの隠れなさ、明るさが存在の光を暗くする」¹⁶⁾。即ち、存在は存在するものにおいて sich-entbergen するとともに、その中に sich-entziehen し、自らを拒否し偽装することによって、自らを顕すのである。しかして、非隠蔽性、ἀ-λῆθεια が真理であるから、隠蔽 λήθη は不真理である。したがって上のことは、真理が存在するものを露わにすることにおいて、あらかじめ存在そのものを隠すこと、即ち不真理を生むことにほかならない。そのかぎり、「真理の本質は不真理である」¹⁷⁾ともいえるであろう。真理は不・真理の克服として、自己自身のうちに二重否定的構造をもつのである。

しかも、真理は存在の開示であるから、二重否定はまた存在そのものの性格である。そこから「存在の中に無化の由来が潜んでいる」¹⁸⁾、「存在は、存在として、無化する」Das Sein nichtet—als das Sein ことも明らかとなる。存在を現としてとりこむ開存としての現存在は、この故に、必然的に存在の二重性を反映する。即ち、人間は ek-sistent であることによって、そのつどの存在者を発見するが、そのことによって同時に、その存在者に執着・閉存し insistent、全体としての存在者を隠蔽し、存在と存在者の混同、この混同から発する存在者の関係の混乱、迷い Irre を起すのである。換言すれば、Sein-lassen する現存在の自由そのものの中に隠蔽が生じ、不真理が宿るのである。してみれば、人間が存在するものに執着し、迷い誤るのは、彼の怠慢や無能力によるものではなく、実に開存としての彼自身の構造に属している。

かくて、人間自身の錯誤 das Sichversehen des Menschen は、存在の明るみが自らを守蔵すること das Sichverbergen des Lichtung des Seins に呼応して起るものだとすれば、人間の錯誤はかえって存在の贈与・運命として、それ自身積極的な意味と力をもつはずである。もししかば、主体性としての人間の在り方、対象的思惟とそれに基づく科学や技術等、存在するものに対する執着の歴史としてのニヒリズムは、われわれが勝手に否定したり、克服したりすべきものではなく、またできるようなものでもない。むしろ、超個人的な問題として、運命的に受容されなければならないものであろう。運命として受容することは、無氣力に隷従することと同じではない。在るものを在るべき姿においてその如く肯定してゆくこと、したがって積極的にその価値を見出してゆくことである。まさにこの点に、実存の問題は第二の転回を、即ち現実を Geschick として積極的に受容し、参加する存在から存在するものへの再転回、主体性としての人間の在り方の再肯定を迫られるのである。

9

存在の思惟は、存在の無言の語りかけに対する人間の行為的応答であった。両者の関係は、存在の一方的語りかけであり、人間の一方的応答である。そのかぎり、存在に聴従し、存在に帰郷

16) Heidegger, M.: Holzwege, S. 310

17) Heidegger, M.: Vom Wesen der Wahrheit, S. 21

18) Heidegger, M.: Über den Humanismus, S. 43, 44

すること Heimkunft は、自ら主体的、積極的に世の中に生きること、現実に対する責任ある起動 Verwirklichung としてしか表せない。そして、もしわれわれが現実の世界から逃避せず、そこに責任をもって生きようと思うなら、われわれは客観的・内容的諸領域の意義と力を正當に評価し、それと適切に関わらなければならない。われわれの時代の問題は、人間が人間でなくなっているということとともに、もの Ding がものでなくなっていることにある。存在を不断に回想するということは、存在するものについての思惟を否定し、物との関わりから隠棲することではない。存在の思惟はただ存在者の思惟の根拠へと還ってゆくこと、還源 Rückgang なのであって、除去すること Beseitigen ではない。したがって、両者は互いに矛盾するものではなく、相互に予想し合い、求め合うものである。事実プラトンにあっては、存在そのものとしての最高のイデアが、同時に善のイデア τὸ ἀγαθόν であった。存在の根源的開示性なしには、一切の人間の行為が不可能であることをおもえば、存在の開示は、人間にとって一切の有用性の根拠として、有用化そのもの das Tauglichmachen schlechthin であり、根源的価値と見做されてもよいであろう。¹⁹⁾ そのとき、実存哲学の立場から一度は否定された従来の連続的・方法的教育学も、存在への還源において批判されるだけでなく、存在からの起動において、積極的に再評価されなければならないだろう。その点、ハイデggerにあっては、存在への還源は徹底されているが、現実生活への起動の側面は、未だ積極的に説かれていない。現実との接触、内容的なるものの肯定なしには、それに対する批判も、超越も、結局は抽象的であり空虚なものとなるのである。

かくて、実存哲学のもつ二つの問題点、即ち敬虔ないし信頼の欠如と、現実との接触喪失は、存在への還源と存在からの起動として、両者の相即において克服されなければならない。したがって、教育作用も、還源と起動の両面から、存在論的に反省される必要があるだろう。そして、このための努力の手がかりを、私はキェルケゴールの実存を社会的歴史的次元にまで拡大しようとしたティリッヒの実存哲学にみたいと思うのであるが、その詳細は他日に譲らなくてはならない。

10

教育は、最広義において人間を人間にすることである。しかし、狭義には、人間が人間を人間にすることである。そのかぎり、対象的思惟に基づく表象と、意図的な操作を欠き得ない。Vorstellung は Sicht 視点に応じて無限に多様であり、したがってまた、多様な Herstellung が可能である。この意味で、教育現象を多層的構造 Schichtenbau においてとらえようとしたシュプランガーや、フリットナーは正しいであろう。²⁰⁾ しかし、如何に精緻な人間像、人間観に基づく慎重な操作であっても、それが主体の客観であり、究極的には主体の意志の表れである以上、それを絶対化、固定化すれば、必然に被教育者の否定、物化となる。そこに意図的形成としての

19) Heidegger, M.: Platons Lehre von der Wahrheit, S. 38

20) Spranger, E.: Pädagogische Perspektiven, 参照

Flitner, W.: Allgemeine Pädagogik, S. 25~65

狭義の教育が、人間生成としての広義の教育からすれば、非教育的ないし反教育的となり得る由がある。しかも、われわれが教育を層構造において考察するとき、直ちに直面する困惑は、生の諸層の内部および相互の中には、互いに相容れ難い矛盾と葛藤がみられることである。²¹⁾そしてこれら諸層の統一にあたり、不調和な部分を抑圧ないし切除するという仕方ではなく、不調和を包んで調和してゆくものを展開させることこそ教育にふさわしい仕方であるとすれば、われわれは、これらの層に共通する何らかの根本原理ないし基盤を発見することが必要となる。これを可能にする唯一の途は、おそらく、われわれにとって最も単純な奇蹟、即ち「あるものがある」ということのもつ意味との関連において、問われるほかあるまい。

このような事情から、私は主体性としての実存と、開存としての実存を、いわば反転図形的に透視した人間理解が必要ではないかと思う。存在するものをそのものとして開示し、そこにおいて対象化が可能となる場所が自覚されているとき、総ては主体の条件として相対化されると共に、存在の運命として絶対性を与えられる。われわれはそこに、人を人とし、物を物として対しつつ、悲観と楽観、懐疑と狂信をこえて無限の実験を基礎づけることができるだろう。ティリッヒの表現を借りるならば、それは超越的現実主義 self-transcendental realism の立場だといつてよいかもしれない。そして、このような地平から、人間生成という出来事を現象学的に探究し、実存哲学が閑却した価値の問題を、いま一度検討し、定位し直してゆくことが必要であらう。

21) Tillich, P: Love, Power, Justice, § 1参照